

昭和小学校
「学力向上実行プラン」

(1)基礎的・基本的な知識・技能の習得

①「アクティブラーニングの視点に立った、わかる授業の工夫・実践」
②「児童の聞く力・表現する力の育成」

学力向上推進員	管理職委員	校長:新田 恭一 教頭:松永 健治 6学年主任:原田 三知子 5学年推進員:中内 悠久哉 4学年推進員:安藤 仁美 3学年主任:荒井 佳代 1学年推進員:西野 瞳
2学年主任 多富 美智		

校長
新田 恭一

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ ドリル学習やスキル学習に取り組む習慣が付き、基本的な漢字の読み書きや四則計算が定着してきている。	宿題や学習課題に確実に取り組み、基礎的・基本的な知識・技能が習得できる。	高学年は全国学力調査・ステップアップテストで平均正答率が県平均以上にする。 低学年は国語・算数の単元テストの目標達成率(平均点が80点以上の児童の割合)を80%以上にする。	ノートの見直し ノートの点検を定期的に行い、指導の充実を図る。また、パワーアップタイムなどの時間を活用して多様な問題を解く機会を確保に努める。	①板書を工夫し、ノート指導を定期的に行っていると自己評価した教員は90%で、目標を達成できた。 ②確認テストを定期的に行っていると自己評価した教員は95%で、目標を達成できた。 ③多様な問題を解く機会を設けていると自己評価した教員は80%で、目標を達成できた。	・6年の全国学力調査は、国語・算数・理科のどれも平均正答率が県平均以上であった。5年生のステップアップテストも、国語・算数ともに平均正答率が県平均以上であった。 ・低学年は目標達成率が87%で、成果指標を達成できた。
課題 学力に二極化傾向がみられ、各学年に学力の低い児童が数名いる。下位層では、学習に取り組む日頃の態度なども、基礎学力の定着に関係していると思われる。苦手意識が基礎学力に大きく反映していて、学習意欲の向上が課題である。	具体的方策(教員の取組) ①ICT機器等を活用しながら分かりやすい板書を工夫し、問題解決の流れにそったノートがとれるような指導を行う。 ②パワーアップタイムなどの時間を計画的に活用して、ドリルやスキル学習に取り組む時間を確保する。 ③学習ガイドなどを活用して多様な問題を解く機会を設ける。	取組指標 ①「板書を工夫し、ノート指導を定期的に行っている」(自己評価)の割合を90%以上にする。 ②「児童の実態に合わせた内容の確認テストを定期的に行っている」(自己評価)の割合を80%以上にする。 ③「学習ガイドなどを活用して多様な問題を解く機会を設けている」(自己評価)の割合を80%以上にする。		評価 A	次年度における改善事項 ・学習ガイドや学力向上確認プリントなどを活用することで、さまざまな問題を解く機会を多く設けることができた。引き続き、次年度も多様な問題を解く機会を積極的に設けていく。 ・高学年は、成果指標を達成することができた。低学年も成果指標を達成することができたが、国語の目標達成率が算数より低かった。パワーアップタイムなどの時間の使い方を見直し、国語の基礎基本の定着に向けてさらに取り組む必要がある。

(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ スキル学習(話す・聞く)を生かしながら、与えられた表現の場で、積極的に自分の考えを表現したり伝え合おうとしたりする態度が見られるようになってきた。	話し手の言いたいことを考えながら聞き、目的や相手に応じて根拠を示しながら進んで自分の考えを表現することができる。	国語科における「読む力」・算数科における「数学的思考力」を評価する問題の正答率の到達目標を、各学年の発達段階に応じて設定し、達成できた児童を70%以上にする。	引き続き、相手の意図を捉えながら聞いたり、考えの根拠を明確にして話したりする話し合い活動を推進する。また、学習活動の中に自分の考えを書く活動を短時間でも継続して取り入れる。	①取組指標のような話し合い活動を積極的に取り入れていると自己評価した教員は95%で、目標を達成できた。 ②書く活動の取組指標について、できていると自己評価した教員は91%で、目標を達成できた。	・国語科における「読む力」・算数科における「数学的思考力」を評価する問題の正答率の到達目標を達成できた児童は85%で、成果指標を達成することができた。
課題 決められた手順のない場では、スキル学習(話す・聞く)の成果が十分に発揮されていない。理由や解決方法などの自分の考えを、自ら進んで表現することに苦しんでいる児童が多く、算数科における「数学的思考力」を評価する問題の正答率が低い傾向がある。	具体的方策(教員の取組) ①多様な意見や考えが生まれるような学習課題を設定し、ペアやグループで話し合う機会を積極的に設けて、話し手の意図を捉えながら聞いたり、自分の考えの根拠を明確にして話したりさせる。 ②学習活動の中に書く活動を取り入れ、自分の考えを深め、まとめる機会を積極的に設ける。	取組指標 ①「話し手の意図を捉えながら聞いたり、自分の考えの根拠を明確にして話したりする話し合い活動を積極的に取り入れている」(自己評価)の割合を85%以上にする。 ②「書く活動を取り入れ、自分の考えを深め、まとめる機会を積極的に設けている」(自己評価)の割合を90%以上にする。		評価 A	次年度における改善事項 ・全体的には成果指標を達成することができたが、算数科における「数学的思考力」を評価する問題の正答率が、国語より低かった。算数の授業における自力解決の場や練り上げの場の保障と充実さらに努めていく必要がある。 ・引き続き、各教科において書く活動の充実を図るとともに、話し手の意図を捉えながら聞いたり、自分の考えの根拠を明確にして話したりする話し合い活動を推進していく。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ ドリル学習やスキル学習に取り組む習慣は定着している。好んで本を読む児童の割合も増加している。	進んで学習に取り組む、学が楽しさやわかる・できる喜びを感じることができる。	自主的に学習に取り組んだ児童の割合を80%以上にする。(自己評価カード)	家庭学習について定期的に指導・点検する機会を設け、その際に家庭学習の手引きを繰り返し活用する。また、参観授業や懇談の機会を捉えて家庭への啓発を続ける。	①③はできていると自己評価した教員が90%以上だったが、②は75%と目標に届かなかった。	・学校や家庭で進んで学習に取り組んでいると自己評価した児童は83%で、成果指標を達成することができた。
課題 決められた課題には取り組むが、自分から課題を見つけて主体的に取り組もうとする態度は育っていない。また、家庭学習の手引きがあまり活用されず、家庭での学習・読書習慣が十分に定着していない。	具体的方策(教員の取組) ①授業に児童の主体的な体験や活動を積極的に取り入れる。 ②家庭学習の手引きの活用の仕方を繰り返し指導すると共に、参観授業や学年懇談・学年便りなどの機会を捉えて保護者への啓発を図る。 ③学級文庫の充実と朝の読書タイムの時間確保に努め、児童の読書習慣の定着を図る。	取組指標 ①「授業に児童の主体的な体験や活動を積極的に取り入れている」(自己評価)の割合を85%以上にする。 ②「家庭学習の手引きを活用して家庭学習の取り組み方について指導し、機会を捉えて保護者への啓発を図っている」(自己評価)の割合を80%以上にする。 ③「読書指導を積極的にしている」(自己評価)の割合を90%以上にする。		評価 B	次年度における改善事項 ・昨年度に引き続き、家庭学習の手引きの活用が十分にできていない。家庭学習について、定期的に指導・点検する機会を設けていくとともに、家庭学習の手引きの内容自体をもっと活用しやすいものに改善していく必要がある。各家庭の協力を得られるように、機会を捉えて保護者への啓発も図っていく。

平成30年度 学力向上ロードマップ



